



それに、暇でしよ。

3 依子はそうは言わないが、そう思っているように感じる。

わたしは甘夏の入ったビニール袋を持ち、管理人室に向かった。

管理人室はエントランスの出入口近くにある。

窓口の奥が小部屋になっている、よくあるタイプだ。スライド式のガラス窓はいつも閉じられており、必要があれば管理人がそのつど中から開けて対応するようになっていた。

海老川さんは、窓の向こうで斜めに座り、なにかぼんやりと眺めていた。わたしが近づいていくとふと顔を上げる。わたしはガラス越しに「海老川さん」と声をかけた。

海老川さんは立ち上がり、わざわざ管理人室のドアを開けて姿を現した。わたしは戸口でビニール袋を差し出す。

「愛媛の親戚から甘夏がたくさん届きましたね。少しですがどうぞ」

「これはどうも」

甘夏を受け取る海老川さんの後ろに、モニターがあった。防犯カメラの映像が映っているらしい。これを眺めていたのか。海老川さんは言った。

「あ、権野さんち、水羊羹は好きかな」

「ええ、まあ」

「昨日いただいたんだけど、実はあんが苦手だね。もらってもらえると助かる。ちよつと待っててください」

それも誰かからのお礼だろうか。いろんなものもらうんだな。甘夏も好きではなかったらどうしよう。

そんなことを思いながら立っているわたしに背を向け、海老川さんは中に向かった。

初めてのぞいた管理人室は、思ったより広く感じられた。外から見ているぶんには海老川さんが座るスペースぐらいしかないように見えるが、奥には小さな流しや収納棚まである。

ファイルの詰まったラック、デスクの上の書類の山、壁にかかったホワイトボード。立派な「オフィス」だった。

そして目の前には、大きなガラスの窓。

「……………窓」

わたしは無意識につぶやいていた。

和菓子屋の紙袋を手にした海老川さんが振り返る。わたしは取りつくろって言った。

「あ、いや。管理人の仕事って、どんなことをするのかと思って。定年退職して時間をもてあましていまして、いい雇用先があればと」

4 その場しのぎの言葉だったが、口にしてみると5へへでたらめでもなかった。体が元気で時間があって、無職であることがつらいなら、また働けばいいのだ。そんなことは充分わかっていた。

しかし、会社勤めしかしてこなかった自分が、定年後に再就職先とする場所はなかなか考えつかない。六十歳で退職せず、六十五歳ぎりぎりまで継続雇用を希望したのだからという理由からだ。

海老川さんは小さく「どうぞ」と言った。わたしは中へ足を踏み入れる。

「ここ、住人の方は原則として立ち入り禁止なんです。もし何か聞かれたら、管理組合の向上について相談をしていたとか言ってくださいね」

そして少しの間、海老川さんは管理人の仕事についてぼつぼつと教えてくれた。業務内容や時給のこと、どういふところで募集をかけているか。彼はわたしのひとつ年上だった。

窓の外では、右へ、左へと人々が行き交う。

住人、来訪者、宅配便業者。

子ども、大人、老人。

6 その風景を見ていたら、「窓」の詩が思い出された。

波はよせ。波はかえし。

海老川さんはこうやって、どんな日も毎日、人の波を窓から見ているんだな。

毎日、繰り返し繰り返し続く、人々の生活、営みを。わたしは言った。

「いろんな人が、通っていきますね」

「ええ。不思議なものでね、ガラス一枚隔っているだけなのに、こちら側とあちら側を、まったく異世界に感じるんです。水族館の水槽の中を見ているみたいに、魚が泳いでいるように感じる。でもあちら側からは、この管理人室こそ小さな水槽に見えるんじゃない」

海老川さんは笑った。

たしかに、そうかもしれない。無機質なガラスは、生き物の気配をあつさり遮断する。

少し前に、エントランス付近で大声でケンカしている若夫婦を見たことがある。窓の向こうに人がいるという意識が薄かったのだろう。彼らは私に気づいてはつと話をやめたが、その前に海老川さんには全部聞こえていたかもしれない。

背中の丸まったおばあさんがエントランスに向かってゆっくり通り過ぎる。こちらに向かつてべこんとお辞儀をした。海老川さんにつられてわたしも一緒に辞儀をし返す。

顔は見たことがあるが、どの階の住人かわからない。海老川さんは言った。

「ああ、よかった。今日もお元気そう。だいたい同じぐらいの時間にここを通るんですよ。おひとりて住んでいらっしゃるからね、気にかけてる。私は一時期、整体師をしていたこともあったから、歩き方で体調がちよつとだけわかるんです」

わたしは目を見開いた。

「海老川さん、自転車屋さんだけじゃなくて整体師もやっていらしたんですか」

海老川さんはハッと笑う。

「いろんな職を転々としてました。やってみたいなって思うともう、いてもたってもいられなくなってしまう性分」

「へえ……。でもそれが、のちのち役に立つんだから、すばらしいですね」

感心しているわたしに、海老川さんはのんびりと答えた。

「でも、何かを始めるときにはそれが後から役に立つかどうかなんて、考えたことないですよ。ただ、心が動いたら、それだけでトライする理由になると思うんです」

A 心が動く。

わたしは、そんな気持ちになったことがあっただろうか。海老川さんは続ける。

「どれくらい職を変ったかな。サラリーマンだった時代もあるけど、それだつていくつも会社渡り歩いたし。製紙工場にハウスクリーニングに、保険屋、自転車屋、ラーメン屋。ああ、骨董屋もやったな」

「骨董屋を。へえ」

海老川さんはくしゃりと顔をゆがめ、でも楽しそうに言った。

「あれは一番儲けがなかったな、面白かったけどね。最後は借金抱えて店じまい。遠縁の親戚のところに仕事を世話してもらいに行ってる間、金を借りてた知り合いに逃げたと思われて、警察が私を捜索して回ってた。そのあとちゃんと働いて返すもん返したけど、当時の常連客の間では、最近まで逃亡者と思われてたらしいです。警察ってのは騒ぐだけ騒いで、解決したっ

てことは言って回ってくれないからな」

「注」職務質問されたことが思い出されて、わたしはぶんぶんと首をタテに振る。

しかし海老川さんは穏やかに続けた。

「でも警察はちゃんとやるべき仕事をしてただけですからね。知り合いに連絡しなかった私が悪い」

わたしは振っていた首を止める。そうだ。あの若い警察官も、やるべき仕事をしてただけだ。子どもたちを守るために。立派じゃないか。

「今は、**ゴカイ**がとけたんですか」

わたしは訊ねると、海老川さんはふつと優しい笑みを浮かべた。

「ええ。不動産の仕事してる常連客のひとりだが、この管理会社とつながってるね。偶然顔を合わせる機会があつて。昔、店によく来てた当時の高校生が今、アンティークショップを開く準備してるって聞きました。あのころはまだ十代だったのに、もう三十半ばだつて。私はダメだったけど、誰かの人生に店を開くきっかけを与えられたなら、まあ、よかったかな」

わたしは海老川さんの横顔を見た。刻まれた皺。乾いた皮膚。

彼はどこか遠視していて、依子の言うように、7 まるで仙人みたいだつた。

海老川さんは、いろんな職を、そしていろんな出来事を経験しながら、誰かの人生を明るく変えるような偉業を成し遂げたのだ。きつとその高校生だけじゃなく、たくさんの人に光をもたらしに違いない。

8 わたしはうつむいた。

「……………すごいな。わたしは今まで、ずっと同じ職場で任じられた仕事をこなしてただけです。海老川さんのように、生きざまが誰かに影響を与えるようなことは、なにも。会社を辞めたとたん、社会から無用の存在になつてしまった」

すると海老川さんは、やわらかく笑った。

「社会って、なんでしようね。権野さんにとって、会社が社会ですか」

胸に何か刺さつたやうで、わたしは**シンゾウ**のあたりを手で押さえた。海老川さんは顎の先を少し窓に向ける。

「何かに属するって曖昧なもんです。同じ場所にいっても、こんなふうに透明な板を挟んだだけでその向うのことは自分とは関係ないような気持ちになりますよね。この仕切りを外せば、とたんに当事者になるのに。見るのも見られてるのも、同じことなのにね」

海老川さんは、わたしの顔をじつと見た。

「私はね、権野さん。人と人が関わるのならそれはすべて社会だと思ひます。接点を持つことによつて起こる何かが、過去でも未来でも」

接点を持つことによつて起こる何かが、過去でも未来でも……………

仙人の言葉はなんだか高度で、わたしにはうまく呑み込めなかった。

でも海老川さんの言うように、わたしにとって社会は会社だったのかもしれない。そして、それはもう、窓の外だと思つていた。ガラス越しにぼんやりと眺めるしかない、見えるのに触れられない世界。

たとえばこのマンションで普段、窓のあちら側を歩いているわたしは、今、こちら側で海老川さんと話をしている。

海老川さんの言葉どおりに考えるなら、彼と接点を持つている今のわたしにとつてこの場所も……………社会なのか？

波はよせ。波はかえし。波は古びた石垣をなめ……………。

社会に荒波はつきものだ。

草野心平は、どこの窓から海を見つめていたのだろう。

なぜ浜辺ではなく窓からだったのだろう。

それは海の美しさも恐ろしさも知っていたからではないか。だからあえて、ガラスを隔て、その世界を他者として傍観してみたかったのではないか。

もちろん、こんなことは単なるわたしの想像だ。

だけどわたしは少しだけ、ほんの少しだけ……………。彼といっしょに、生きた気がした。

翌日の昼、わたしはひとりで駅ビルの明森書店に行った。依子には言わずに来たが、甘夏をふたつ持ってきたので今ごろばれているかもしれない。

千恵は文庫コーナーで本の乱れをなおしているところだつた。声をかけると、「最近よく来るね！」と笑つた。

平積みされた文庫の山に、明るいピンク色の『注』POPが立っている。葉のイラストが描かれ、『ピンクのプラタナス』という文字が立体的にデザインされていた。

「これも、千恵が作ったのか」

「うん。彼方みづえ先生のピンブラ。映画公開、発表されたから」

文庫の帯に、人気女優ふたりの顔写真が載っている。彼女たちが主演するのだろう。千恵はうつとりと言つた。

「ポイントにいいのよねえ、この小説。何気ない会話にぐつとくるのよ。女性読者だけじゃなくて、お父さんぐらいのおじさんが感動して泣いたって言うてるの。雑誌連載で終わらないでちゃんと本になると、内容は同じでも手に取る読者層が広がるんだよね、素敵なことだよな」

へえ、とわたしは興奮気味な千恵を見る。千恵は言つた。

「本買いに来たの？」

「いや……………。ちよつと、おまえに聞きたいことがあつてな」

千恵は目をくると動かし、小声になつた。

「もうちよつとで休憩だから待つて。お昼ごはん食べようよ」

昼休憩は、四十五分間だという。エプロンを外した千恵とふたりで、駅ビルのレストランフロアに行った。蕎麦屋に入り、テーブル席で向かい合う。

温かいほうじ茶を一口飲み、千恵はふうと息をついた。

「忙しいのか」

「今日はそれほど」

湯呑を持つている指の爪が、短く切りそろえられていた。大学のころは、長い爪になにやらいろんな色を塗っていた気がする。千恵は弱く笑つた。

「正社員登用の話があつただけだね、やっぱりだめだつた」

千恵は今年で勤めて五年になるはずだが、契約社員から正社員になるのは難しいと聞いていた。書店業界はなかなか厳しいらしい。

「……………そうか。残念だったな」

「ううん、働けるだけありがたい」

蕎麦が運ばれてきた。千恵は天ぷら蕎麦、わたしはきつねうどんだ。

「書店、減ってるっていうもんな。今、本って売れないから」

揚げを汁に浸しながらわたしは言つと、千恵はむつと『a』を曇らせた。「やめて。みんながわかつたような口ぶりでそう言うから、そんな流れになっちゃうんだよ。本を必要としている人はいつもいるの。誰かにとつて大切な一冊になる本との出会いが、本屋にはあるんだよ。私は絶対、この世から本屋を絶やさせたりしない」

千恵ははずつと蕎麦をすすった。

正社員になれないとばやきながら、そんな壮大なことを考えているのか。

B 心が動くつて、そういうことなのかもしれない。本当に好きなんだな、本が。そして、本屋の仕事が。

「……ごめん。千恵、がんばってるのにな。父さんよりずっと立派だ」
わたしが箸を止めると、千恵はかぶりを振る。

「ひとつの会社で最後までずっと勤め続けたお父さんだって、すごいよ。がんばったよ。呉宮堂のハニードーム、みんな大好きだし」

「いや、父さんが作った菓子じゃないから」

「^{【注3】}小町さんともそんな会話をしたなと思いが、わたしはまた箸を動かす。千恵はぎゅっと」 **b** 》

「えー？ それを言うなら、私が書いた本なんて一冊も売ってないよ。でも、私がこれがいい！ って思った本が売れたら、めちゃくちゃ嬉しい。だからPOPにも気合が入るの。自分が推す本って、気持ち的にはちよつとだけ、私の本ってぐらいいってるよ」

千恵は天ぶらにかぶりつく。

「作る人がいるだけじゃ、だめなのよ。伝えて、手渡す人がいなきゃ。一冊の本が出来上がるのころから読者の元に行くまでの間に、いっただいだけ多くの人が関わってると思う？ 私もその流れの一部なんだって、そこには誇りを持ってる」

わたしは千恵を見た。こんなふうに、ちゃんと向き合ってる仕事の話をしてきたことなんかなかった。いつのまにこんなに……大人になって。

わたしが作ったんじゃないハニードーム。でもわたしも千恵のように、すばらしい菓子だと熱意を持って勧めてきた。誰かがおいしいと顔をほころばせる瞬間にたどりつくまで、その流れの一部になれていたことがたしかにあったかもしれない。 **10** そう思うと、わたしの四十二年間も報われる気がした。

「あ、そうだ。そういえばさ」

蕎麦をあらかた食べ終えたところで、千恵はトートバッグに手をかけた。中から本を取り出す。『げんげと蛙』だ。

「お父さんが草野心平を読んでいるなんて聞いて嬉しくなって、買った」
千恵は本を開き、ぱらぱらとめくった。

「この『窓』って詩がいいよね。この詩集の中で、ちよつと異質な感じがする」
親子で同じ詩に心を留めたことが嬉しくて、わたしは訊ねる。

「これ、なんて『窓』ってタイトルなのか、不思議にならなかったか」
ページに目を落としたまま千恵は、うーん、と唸った。

「私の想像だけど。民宿に泊まってさ、窓を開けたら海！ ってなって、感動したんじゃない？ それまで部屋の中しか見てなかったのが、外にこんな世界が広がってるって知って。窓辺で**シオカゼ**に吹かれながら、雄大な海に人生を重ねてたのよ」

最後のほうはイメージの世界に **11** 身をへ 》ようにして、本を開いたまま胸に押しあてる。驚いた。同じ文章なのに、わたしとはまるで違う風景を千恵は見ているのだ。

千恵といっしょに生きる草野心平は、ずいぶんと明るくて ^{【注4】} ポジティブだ。

詩っていいな。わたしは心から、そう思った。

実際のところは草野心平にしかわからない。でも **12** 読んだ人それぞれ

の解釈があつて、それがいい。千恵は本を閉じ、表紙の蛙をそつとなでた。
「私にとっては、自分が読者として本を買うことも流れの一部なんだよね。出版界を回してるのって、本に携わる仕事をしている人だけじゃなくて、なんといつもいちはんは読者だもん。作る人と売る人と読む人、本って全員のものでしょ。社会って、こういうことだなあって思うんだ」

社会。

千恵の口から出たその言葉に、はっとした。

世界を回しているのは……仕事をしている人だけじゃなくて……。

千恵は本をバッグにしまう。そのとき、バッグにあのカニがくっついてるのが見えた。わたしが思わず「それ」と指さすと、千恵は **13** あどけない表情を見せた。

「あつ、これ。かわいいから、裏に安全ピンつけてバツジにしたの。いいでしょ」

よかった。このカニも、わたしの手元にあるよりもずっと楽しく生きられて本望だろう。

千恵はカニを見ながらほほえむ。

「……小学校のときさ、親子カニ競走ってやったじゃない？」
「カニ競走？」

わたしがきょとんと聞き返すと、千恵は笑った。

「覚えてない？ 三年生のときよ。運動会の親子競技。背中合わせになって、カニ歩きで競走するやつ。結果はビリだったけど」

「そ、そうだったな」

「お父さん、あのとき言ったんだよ。カニ歩きするとおもしろいな、景色が横に通り返っていくの、いつもより広い世界が見えるなって。横歩きって」 ^{【注5】} ワイドビューになるでしょ」

ばんやりと、そんなこと言ったかなと思う。でもきつと、千恵の記憶が正しいのだろう。千恵はちよつと照れ臭そうにうつむいた。

「私、大人になってから、お父さんのあの言葉を時々思い出すんだよね。前はつかり見ると、視野が狭くなるの。だから、行きづまって悩んだときにふつと、見方を広く変えてみよう、肩の力を抜いてカニ歩きしてみようって思うの」

そんなふうに、思っていてくれたのか。

わたしは胸がいっぱいになって、泣きたいのを必死でこらえた。

長い間、ずっと気がかりだったんだ。

おまえが大きくなるまで、仕事ばかりで依子に育児を任せきりだった。一緒に過ごす思い出が少なかったかもしれない。わたしは娘に、何も教えてやれなかったかもしれないと。

——人と人が関わるのならそれはすべて社会だと思っんです。接点を持つことによって起こる何かが、過去でも未来でも。

海老川さんの言っていたことがようやく理解できた気がする。

会社だけじゃない。親子の間にもちゃんと「社会」があったのではないか。

14 幼いころにわたしが何気なく口にした言葉を、大切に解釈して自分のものにしてくれた千恵。成長したその姿に大きく心を揺さぶられるわたし。千恵のバッグで、動き出さんばかりのカニが私を見ている。

わたしはこれまでずっと、前へ前へと歩いてきた。人生は夕テに伸びているものだと思っていた。

でも今、横歩きの景色には何が見えるだろう。

そばにいてくれる娘が、妻が、日々の生活が、どんなふうに映るだろう。

千恵が店員に向かって片手を挙げ、ほうじ茶のお代わりを頼む。そして思い出したようにわたしを見た。

「そういえば、聞きたいことって何？」

【注】

1 職務質問 警察官があやしい者に道ばたで行う質問。

2 POP 書店員が本の宣伝のために書いたカード。

3 小町さん 「げんげと蛙」を貸し出してくれた図書館の司書で、カニのマスコットを本と共にくれた。そのカニは千恵の手に渡った。

4 ポジティブ 〓ものごとに対して前向きであるようす。

5 ワイドビューになる 〓視野が広がる。



問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 ぼつへ へなとありますが、へ へに入れるのにもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア けだるい イ せつない ウ ねむたい エ まぶしい

問三 2 そうか、蛙が鳴いているのかとありますが、

- (1) これは【詩】の中のどの部分を読んでこのように言っているのですか。【詩】の中からぬき出し、はじめとおわりの三字を書きなさい。
(2) (1)を「わたし」はどのようなものだと感じていますか。【文章】の中からぬき出し、解答らんに合わせてはじめとおわりの三字を書きなさい。

問四 3 依子はそうは言わないが、そう思っているように感じる とありますが、この時の「わたし」の気持ちとしてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 海老川さんに自転車のブレーキを直してもらったことになった責任を依子に追及されているように感じている。
イ ほとんど話したこともない管理人なのに甘夏をおすわけしようとする依子の熱心さに気おくれしている。
ウ 詩を読んだり自転車に乗ったりなどの新しい楽しみを見つけたのに依子に否定されたようで気分が沈んでいる。
エ 定年退職して時間をもてあましていることに對する後ろめたさを依子に言い当てられたように感じている。

問五 4 その場しのぎの言葉 とありますが、これと同じ意味になるように【文章】の中からぬき出し、解答らんに合わせて書きなさい。

問六 5 へ へでためでもなかった とありますが、へ へに入る語としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あたかも イ あながち ウ ことごとく エ すこぶる

問七 6 その風景を見ていたら、『窓』の詩が思い出された とありますが、なぜ思い出されたのですか。【文章】の中の言葉を使って説明しなさい。

問八 7 まるで仙人みたいだった とありますが、どのようなところが「仙人みたい」のですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 長年行き交う人々を眺めることで、人間のあるべき姿を理解しているところ。
イ 職を転々とし借金を抱えるなどの苦勞もしたが、それを気にかけないところ。
ウ 皺が刻まれて皮膚が乾いているなど、長い間生きてきたことがわかること。
エ 優しい笑みを浮かべ穏やかに接することで、人を安心させる力があるところ。

問九 8 わたしはうつむいた とありますが、この時の「わたし」の気持ちとしてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」は職務質問されたことを怒っていたが、警察官はやるべき仕事をしてただけで立派だったと気づき反省する気持ち。
イ 「わたし」は今まで一つの仕事をしてきたことに誇りを持っていたが、いろいろな経験をしておけばよかったと悔やむ気持ち。
ウ 「わたし」は多くの仕事をするこなく過ごしてきた自分には能力がないのだと感じ、自信をなくしてがっかりする気持ち。
エ 「わたし」は仕事を通じて誰かに影響を与えることもなく、退職した今は社会から無用の存在になったと感じ落ちこむ気持ち。

問十 9 それはもう、窓の外だと思っていた とありますが、これはどういうことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 職を渡り歩き最近まで警察に搜索されていたという海老川さんの話は予想外のもので、一つの仕事しかしてこなかった「わたし」には共感できないと思っていたこと。
イ 誰かの人生を明るく変えるような偉業を成し遂げた仙人の言葉は「わたし」にとっては難しすぎて、会社で普通に働いていた自分は理解できないと思っていたこと。
ウ ずっと同じ職場で任じられてきた仕事をこなしてきた「わたし」にとって社会は会社のことであり、退職した今の自分は社会と関係を持つことができないと思っていたこと。
エ 平凡な人生を送ってきた「わたし」は寄せては返す社会の荒波に立ち向かうことはできないと思い、世界は透明な板を挟んだようで直接触れられないと思っていたこと。

問十一 《a》 b 《に入れるのに、もっともよくあてはまるものを》 a 《は漢字一字で答えなさい。》 b 《は次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。》

ア つむじをまげた イ 歯をくいしばった ウ 眉をひそめた エ 胸を打った

問十二 A 心が動く。／わたしは、そんな気持ちになったことがあっただろうか B 心が動くって、そういうことなのかもしれないとありますが、「心が動く」とはどういうことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の興味関心につきうごかされて挑戦してみようとする。
イ 周りが無理だと思っても決意したら最後までやり抜くこと。
ウ 誰も考えつかない大きな目標を持って成長し続けようとする。
エ 好奇心を持っていろいろなことを行い感動を求めようとする。

問十三 10 そう思うと、わたしの四十二年間も報われる気がしたとありますが、なぜ「報われる気がした」のですか。解答らんに合わせて【文章】の中の言葉を使って説明しなさい。

問十四 11 身をへ とありますが、へ へに入る語としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア おこす イ たてる ウ ぶるわす エ ゆだねる

問十五 12 読んだ人それぞれの解釈があつて、それがいいとありますが、「わたし」は同じ『窓』の詩をどのように考えていたのですか。【文章】の中からぬき出し、はじめとおわりの七字を書きなさい。

問十六 13 あどけない と同じような意味の四字熟語としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 清廉潔白 イ 泰然自若 ウ 天真爛漫 エ 優柔不断

問十七 14 幼いころにわたしが何気なく口にした言葉を、大切に解釈して自分のものにしてくれた千恵 とありますが、
(1) 「何気なく口にした言葉」の一文を探し、はじめの五字を書きなさい。
(2) (1)の言葉をどのように「大切に解釈して自分のものにし」たのですか。【文章】の中の言葉を使って説明しなさい。
(3) (1)(2)をふまえて誰かが「何気なく口にした言葉」を「解釈して自分のものにし」た経験を書きなさい。ない場合は、見聞きしたことや想像したことでもよいです。答えは左の解答欄に書きなさい。



タテ

ゴカイ

シンゾウ

登用

シオカゼ

問一

--	--	--	--

問二

--

問三
(1)

}

(2)

}

ものだと感じている。

問四

--

問五

--

言葉。

問六

--

問七

--

問八

--

問九

--

問十

--

問十一
a

--

b

--

問十二

--

問十三

--

けれども、

と気付いたから。

問十四

--

問十五

}

問十六

--

問十七
(1)

(2)

--

(3) 答えは 国語一六の解答らんに書きなさい。

